



平成23年2月21日

## 卓話 『知られざる大久保利通の素顔』

社団法人 霞会館 常務理事

大久保 利泰 様

大久保でございます。利通から申しますと4代目、ひ孫でございます。利通が亡くなったのが明治11年。それから30年ぐら経った頃、まだ利通の同僚や仕えていた人たちが元気で、その人たちの話が当時の報知新聞に連載されました。数年前に講談社からその記事を元にして本が出ました。今日はその本のご紹介と、大久保利通はどういう人間だったのかについてちょっと申し上げたいと思います。

それを読みますと、例えば維新前は加賀藩であるとか長州であるとか、藩が単位だったわけですが、利通が部下に言ったのは、これからは日本という国家の役人である、そのことを自ら任じてやってほしいと。また仕事を任せたら断固として動かず、過ちが多少あってもそれを叱るのではなく、責任は一切引き受けてくれた。また難きは自ら任じ、易きは人にさせる。易きを行って一人収めるのが政治家の通弊だが、難しいことは自分でやる方であった。どの藩の出身であろうと公平で、よく人の話を聞き、どんなに大変なことがあっても落ち着いて、一時の気の逸りでことを為してしまうことのない人だったという評が載っています。

そういう中で大変な事件が起こって、利通は北京に行って清国と交渉をしました。この発端は明治4年に難破した琉球人が台湾の原住民に殺されてしまったことです。清国との交渉がらちが明かず、西郷従道などの血気盛んな者が兵を出すと行って交渉したところ、清国は面倒なことに関わりたくないものですから、あれは管轄外の所だという。管轄外ならいいだろうということで兵を出したら、今

度は他人の領土に勝手に兵を寄こすとは何事だと言う。これは自分が行って交渉しなくてはということで、ダメな場合は戦争もやむなしとの閣議決定を得て明治7年に清国に渡るわけ



です。それまでのりくりと逃げていた清国側も最終的には非を認め、日本側も大義を果たすことができた。そのときの大久保の談判ぶりが、急所を突いてきちんと理にかなっていたとして評価された。

もう一つ、当時、李鴻章という大立者が上海にいて、外国からの訪問客は必ず彼を表敬訪問するのが通例だったそうです。ところが利通は北京の政府と相談するんだからと言って行かなかった。李鴻章は度肝を抜かれたらしいんですが、帰りにはきちんと彼を訪ねて仁義を切った。それが明治7年の11月3日。外交では必ずリターンバンケットというのがあって、今度は李鴻章がホテルにやって来た。11月3日は天長節です。利通は、今日は我が皇帝の誕生日である、貴君と是非シャンペンでお祝いしたいと。これ日記にあるんです。それで清国とお互いに輸出し合おうという話に持っていくことができた。どこかの国の総理大臣の方々にも、この心がけが必要じゃないか。

そういうのが明治の初めにも日本にはいたんだということで、子孫としてお話しさせていただいた次第です。失礼申し上げました。